

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00054

研究課題名(和文)古インドアーリヤ語の重複現在語幹の研究

研究課題名(英文)Study on the Old Indo-Aryan reduplicated present

研究代表者

尾園 絢一(Ozono, Junichi)

広島大学・人間社会科学研究科(文)・准教授

研究者番号：90613662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：主にヴェーダ語に見られるaで重複する現在語幹(da-daa-, da-dhaa-, etc.)、iで重複する語幹(pi-par-, pi-prc- etc.)およびuで重複する語幹(ju-hav-, etc.)をリストアップし、通時的・共時的観点から調査を行った。ヴェーダ語のデータを分析し、重複の仕方、iの重複の機能、補完(suppletion)の観点から重複現在語幹の機能の考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インド・ヨーロッパ語比較言語学において動詞研究は長年進展を重ねており、特にヴェーダ語の各動詞カテゴリーの研究が揃いつつある。その中でも解明が望まれる重複現在語幹の精密な調査に基づき、本研究が取り組んだ重複現在語幹の考察はインド学、印欧語学のみならず一般言語学においても重要な知見となり得ると予想される。

研究成果の概要(英文)：This study examines present stems reduplicated with a (e.g. da-daa-, da-dhaa-), i (pi-par-, pi-prc- etc.) and u (ju-hav-) attested in Vedic from diachronic and synchronic perspectives. It further examines based on the analysis of Vedic data, the function of the reduplicated present from the perspectives of the type of reduplication, function of i-reduplication, and suppletion.

研究分野：インド学

キーワード：重複現在語幹 古インドアーリヤ語 ヴェーダ

1. 研究開始当初の背景

古インドアーリヤ語(サンスクリット)は印欧祖語の形態・機能の多くが保存されており、語幹形成法、接尾辞、語尾などの個々の成語要素が明確な機能を備えた、精密な言語である。そのため、形態とそれに対応する機能に関する理解が文献解釈に直接役割を演じることも多い。文法は文献理解の基盤である。文法研究は19世紀に興った印欧語比較言語学、インド文献学、特にヴェーダ(バラモン教聖典)学の蓄積を基に進められてきた。20世紀前半までの成果を網羅した Wackernagel/Debrunner, *Altindische Grammatik* (1896-1957) は最も広範な学術文法であるが、動詞と副詞の部分が未完である。20世紀後半から Hoffmann, *Der Injunktiv im Veda* (1967), Narten, *Die sigmatischen Aoriste im Veda* (1963), Gotō, *Die „I.Präsensklasse“ im Vedischen* (1987) に代表されるように、個別の動詞カテゴリーに関する根本的研究の出版が相次ぎ、飛躍的に研究が進んだ。それ以降今日まで、現在語幹、アオリスト、2次動詞語幹、話法(Modus)等の動詞カテゴリーに関する研究がさらに進められた。今日までの成果は、Gotō, *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background* (2013) に凝縮されている。同書は初古インドアーリヤ語の歴史文法であり、これによって、ヴェーダ文献研究、古インドアーリヤ語文法研究の新たな段階に入ったと言い得るが、一部のカテゴリーについては未だ本格的な研究に取りかかれないまま今日に至っている。特に重複語幹動詞については多くの課題が残されている。重複語幹とは動詞語根の一部を重複させて作る語幹(例、*dā-dā-ti*「彼は与える」)形成法であり、重複アオリスト(reduplicated aorist)、完了(perfect)強意(intensive)、意欲(desiderative)がある。この語幹については語根重複の仕方やアクセント位置などの形態に関して解明されねばならない点が残されている。また重複現在語幹や語根重複の機能も未だ解明されていない。従来の見解によれば、重複母音 *a* (印欧祖語 **e*) に対しては反復(iterative)、*i* に対しては作為(factitive)の機能が推定されるが、これを文献に基づいて証明することは難しい。インド・イラン内部における比較だけでなく、他の印欧語の重複現在語幹やその他の重複カテゴリーとも比較し、多角的に検討する必要がある。近年、Schaefer, *Das Intensivum im Vedischen* (1994)、Kümmel, *Das Perfekt im Indoiranischen* (2000)、Heenen, *Le desidératif en védique* (2006) 等によって重複カテゴリーにおいても、研究成果が挙がりつつある。残されているのは、重複現在(reduplicated present)語幹、重複アオリスト(reduplicated aorist)であり、根本的研究が望まれる。特に重複現在(reduplicated present)語幹について言えば、まとまった考察がほとんどない状況であるが、各重複カテゴリーの研究、解明が進んだことにより、重複現在語幹に取り組む環境が整いつつある。

2. 研究の目的

古インドアーリヤ語の文法研究は、ヴェーダ文献に例証される言語的事実の分析が基礎にあると同時に、印欧語比較言語学の成果を必要とする。文献学と言語学を総合した動詞研究は世代を継いだ取り組みによって進められてきたが、重複現在語幹については、個別の言語学的考察は見られるものの、厳密な文献学的分析・検証に基づく本格的な研究は未だ存在しない。そこで本研究は重複現在語幹の形態・機能の解明に正面から取り組み、インド学、言語学に信頼し得る資料と道具とを提供することを目的とする。

3. 研究の方法

ヴェーダ語(古インドアーリヤ語の古層)に見られる全ての無幹母音型(athematic)重複現在語幹、完了語幹の話法形、合計約40の動詞語幹を調査対象とし、全ヴェーダ文献(リグヴェーダ、アタルヴァヴェーダ、ヤジュルヴェーダサンヒター、ブラーフマナ、ウパニシャッド、祭式綱要書の刊本)に現れる全用例を検討する。また必要に応じて、パーニニ文法、古典文学作品、叙事詩、仏典等の古インドアーリヤ語文献に見られる語形と比較する。

純粋に形態的観点から、重複音節に *a* を伴うもの(例 *dādāti*「与える」)、*i* (例 *bībharti*/*bībhārti*「担っている」)を伴うもの、*u* を伴うもの(例 *juhōti*「注ぐ、献供する」)、完了語幹の話法形に分類し、重複現在語幹の全用例を全ヴェーダ文献のインデック *Vishva Bandhu, Vedic Word Concordance* (1942-) を用いて収集する。その後、語形が表示する意味、機能、形態的変遷などを文献学的、言語学的観点から多面的に検討する。また用例検索の際には電子テキストも効果的に使用する。ヴェーダ文献の用例調査は、ヴェーダ学者、ヴェーダ祭式の専門家との緊密な連携の下、行う。

用例調査終了後、個々の重複語幹の調査結果を基に機能の分析を行う。同じ動詞から重複以外の現在語幹も形成される場合は、それらの用例も網羅し比較・検討する。さらには同じ動詞から形成されるアオリスト、完了語幹とも比較し、活用(paradigm)レベル、機能レベルにおける分担関係の有無を検討する。またアヴェスタ、古ペルシア語等の古イラン語、或いはその他の印欧語に対応する(可能性がある)語幹が見られる場合はそれと比較し、当該語幹が本来担っていた機能を考察する。インド・イラン内部における比較だけでなく、他の印欧語の重複現在語幹やその他の重複カテゴリーとも比較し、印欧祖語に遡って展開を考察する。

4. 研究成果

重複現在語幹動詞をリストアップし、*a*で重複する語幹と*i*および*u*で重複する語幹とに分類した後、*a*で重複する現在語幹を対象に調査を進めた。その中、代表的な重複現在語幹である、*dadā-* (<*dā*「与える」)、*dadhā-* (<*dhā*「置き定める」)、*rar-* (<*rā*「与える」)を中心に調査を進めた。特に現在語幹の*dadā-*とアオリスト語幹(*a*)*dā-*の機能の違いに焦点を調査を行った。この点と関連して*dā*「与える」の活用を補完 (suppletion) する *pra-yam* 「差し出す」についてヴェーダ語の用例調査を行った。リグヴェーダ第10巻以降に頻繁に現れる、現在語幹 *pra-yaccha-* に焦点を当て、アタルヴァヴェーダ、ヤジュルヴェーダの用例を中心に分析を行い、*dā* と *pra-yam* における意味の差異、パラダイム内における交替の有無、生産性の通時的变化などの観点から両者の補完関係を検討した。*dā* と *pra-yam* の用法の区別についてはまだ解明されていないが、引き続き新規課題においてヴェーダ文献の全用例を網羅し、考察を進めているところである。

dā「与える」、*dhā*「置き定める」の現在語幹とアオリスト語幹の用例を収集し、用法上の違いを相 (aspect)、動作様態 (Aktionsart)、話法 (mood, Modus) などの点から検討した。元来、現在語幹とアオリスト語幹という対応は動作を時間的広がりの中でとらえるか、動作を全体的に捉えるかというアスペクト (相) の違いに対応しており、理論的には *dadā-/dad-* (<*dā*) などの重複現在語幹は反復又は習慣的動作を表し、(*ā*)*dā-* などのアオリスト語幹は完結した動作を表すが、ヴェーダ語においてこうした差異が明確に見てとれる例は少ない。しかしヴェーダ語やギリシア語の話法形 (modal form) の用例を検討する過程で、ギリシア語の対応する重複現在語幹の命令形の中に持続的動作又は反復を表すとみなし得る例が見出された。そこで *dehi*「与えよ」、*dhehi*「置き定めよ」等の現在命令法と *dās*, *dhās* 等のアオリスト言及法 (アオリスト命令法として機能することが多い) 又は命令法 *dhātu* とを比較し、「リグヴェーダ」を中心とするヴェーダ文献における活用上の分布および機能上の違いの有無について検討した。またイランのアヴェスタ語、ギリシア語 (「ホメーロス叙事詩」) において対応する語幹とも比較し、機能的差異について多角的に検討した。その結果、おそらく印欧祖語の段階で、形態論上の理由から命令形は避けられ、またアオリスト言及法が相 (aspect) や文脈に基づいて命令を表すことが明白なため取って代わった可能性があることが分かった。リグヴェーダ以降には相の違いは見えなくなり、古風な命令形となったものと推測される。

i で重複する現在語幹の調査の中、*pi-par-/pi-pr(-a)-* (impf. *a-pi-pr-a-ta* Rigveda V 34,2)「満たす」、*pi-prc-*「満たす」の分析を行い、成果を挙げた。*i* で重複する現在語幹およびアオリスト語幹の一部は作為 (factitive) の機能を持つことが知られているが、重複現在語幹 *pipar-/pi-pī-* と鼻音挿入型現在語幹 *pr̥māti* はいずれも「満たす」を表す。同様に *parc/prc* も重複現在語幹 *pi-prc-* および鼻音挿入型現在 *pr̥makti* を持ち、「満たす、混ぜる」という作為の意味を表す。そこでこれらの動詞について、重複現在語幹だけでなく、ヴェーダに見られる全動詞語幹の用例を集めて分析した。これらはいずれも同じ動詞語根の拡張形から形成された可能性がある。つまり *prālpī-* の動詞語形において語根末尾に喉音 (laryngeal) を伴う形 (set, i.e. *pleh₁*, *p̥lh₁*) と伴わない形 (*aniṭ*, *par*, *pī-*) が同時に現れるのは類推的に *aniṭ* 形が導入されたと一般に理解されてきたが、本研究において **eh₁* による拡張形 **pl-eh₁* と非拡張形 **pel* の差によって説明し得ることを示した。これらの動詞の分析に基づき、*i* による語根重複の機能について考察を行い、学会発表と学会誌投稿を通じて成果を公開した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 尾園 絢一	4. 巻 52
2. 論文標題 古インドアーリヤ語prnaatiとギリシャ語pimpleemi	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Nidaba	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾園 絢一	4. 巻 9
2. 論文標題 ヴェーダ語の命令的言及法（hortativer Injunktiv）について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史言語学	6. 最初と最後の頁 45-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Junichi Ozono	4. 巻 67-3
2. 論文標題 Zur Entstehung der vedischen -aaya-Denominativa aus a-stammigen Nomina	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Indian Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 (7)-(12)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Junichi Ozono	4. 巻 1
2. 論文標題 Correct speech (sabda-): from the perspective of the Veda and Paninian Grammar	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sabdaanigamah. Indian linguistic studies in honor of George Cardona	6. 最初と最後の頁 481-508
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾園 絢一	4. 巻 53
2. 論文標題 ヴェーダ語のヴァリエントdhaks-/daks-について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Nidaba	6. 最初と最後の頁 69-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 尾園 絢一
2. 発表標題 古インドアーリヤ語prnaatiとギリシャ語pimpleemi
3. 学会等名 西日本言語学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Junichi Ozono
2. 発表標題 Once again on the Vedic variants daks- and dhaks-: the relative chronology between Grassmann's law and devoicing-deaspirating assimilation
3. 学会等名 The 7th International Vedic Workshop (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾園 絢一
2. 発表標題 ヴェーダ語の命令的 (hortativer Injuntiv) 言及法について
3. 学会等名 日本歴史言語学会2019年大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾園 絢一
2. 発表標題 ヴェーダ語の-aaya- denominativeについて
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾園 絢一
2. 発表標題 現在命令法dehiとアオリスト言及法 daasについて
3. 学会等名 第11回ヴェーダ文献研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾園 絢一
2. 発表標題 ヴェーダ語のヴァリエントdhaks-/daks-について
3. 学会等名 第53回西日本言語学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------